

第一問 次の文章を読んで、後の問い(問1～9)に答えよ。

「能力主義」が問題にされるべきなのは、端的に言うと、それが現にある不平等を正当化する言説として機能するからである。例えば出自や性別、エスニシティ(注1)などによる不平等について、それを正当だと表立って主張する人は今の日本社会ではさほど多くないだろう。だが「能力」にもとづく格差や能力に応じた処遇の不平等については、ある程度仕方のないものとして多くの人に受け入れられているように思われる。それは、能力に応じた処遇が公正だと感覚され、ある程度格差を意味する。この公正さの感覚はどこから来るのか。本稿で検討したいのは、この感覚と交換の論理との関係である。

能力主義の由来をたどると、それがもともと近代化の過程における伝統からの解放の論理として生まれたことがわかる。身分やカーストによって社会的地位や職業が決まるのではなく、本人の能力次第で職業を選択し、評価され、それに応じた社会的処遇を受けることが公正であるという論理である。ポツコウアつつあったブルジョワジー(注2)を中心として生み出されたこの論理は、産業化によって社会的流動性が高まることと相関して広く受け入れられていった。

(注3)この産業化による伝統社会の近代化は「個人化」として現象するが、同時にそれは出自やカーストによって決まる「その人が何者か」ではなく、「その人が何をしているか」つまり職業によってアイデンティティを決定し、かつ統制するような社会への移行でもあった。注意すべきなのは、いわゆる「伝統からの解放」が必ずしも善だとは言えないということである。例えば、植民地化される前のインドはカースト社会だといわれるが、仔細しさいに見るとそれは職分権体制であり、多様な社会集団の分節的な参加と分有によって成り立っていた。つまり、各々が職分に応じて共同体の生産活動に参加しそこから取り分を受け取ることで、共同体全体の再生産を持続させるような仕組みである。そうした社会においては、個人の

自由を無限に認めることで共同体の再生産を危機にオチイ¹らせるよりも、カーストの方がよほど善きものであった^A。

対して、「近代的」な社会では個人の選択の自由に大きな価値が置かれる。言い換えるとこれは、価値の自身は問わず、各人による異なる価値の追求を可能にする枠組^{わくぐみ}だけを制度化するものである。そこでは同時に、属性によらず誰に対しても社会的地位の達成の可能性を開く「機会の平等」という理念が掲げられる。これが、一般に属性主義から業績主義への移行として語られるものである。

能力主義はこの業績主義とほぼ同一視されているが、よく考えてみると、業績（何をなしたか）と能力（何ができるか）は別である。前者は過去志向であり、後者は未来志向である。もちろん過去の業績は、その人がこれから何をなしようかを示すしるしではある。しかし業績としては現れない能力が様々なかたちでありうることも私たちはよく知っている。また、属性が本人にはどうすることもできない次元を指し、業績は本人の意志と努力次第で変えられるものという区別からすると、能力が天賦^{てんぷ}のものであって本人の意志とは関係がないという意味では、能力主義と業績主義を同一視することには無理がある。にもかかわらず能力主義は業績主義と同じようなものだと思われている^B。

その理由として指摘しておかなければならないのは、能力のなかに「努力」が含まれていて、努力によって能力を高めることができる点である。「メリトクラシー^{（注4）}」という語の生みの親であるマイケル・ヤングも、メリットを「知能＋努力」と定義している。努力の契機が入ることで、能力は単に与えられたものではなく、本人次第で大きくしたり発展させたりできるようなものとしてイメージすることが可能になる。

このイメージのものになっているのは、能力がそもそも個人に帰属するものだということである。もっともあからさまに言うなら、個人が所有しているモノのような何かとして能力はイメージされている。能力が個人に帰されることでその社会的な側面が捨象されるという点に関する批判はこれまでもなされてきたが、さらに重要なのは、個人が所有するモノのような何かとしてイメージされることで、それが交換可能なものとして観念されるという点である。これは、能力主義に

おける「能力」が、実際に何かができることそのものではなく、交換の論理を前提とするある種の説明概念である可能性を示唆する。

実際に何か「できる」ことは「能力」と同じではない。どのような人でもある活動の文脈においては「できる」けれども、別の活動の文脈においては「できない」。例えば、ギターは弾けるが泳げないとか、数学は得意だが料理はからっきしだめとか、若いときには速く走れたが年をとって歩くのも難しくなるといったことがある。あるいは車椅子の人は歩けなくても、エレベーターがあれば一人で移動することができるし、歩ける人でも空は飛べないが、飛行機を使えば空を飛んで別の場所に移動することができる。つまり、全く何もできない人もいなければ、あらゆること^(注6)ができるという人もいない。できる／できないというのは存在の問題ではなく、状況や環境、使えるリソース、活動の文脈の問題だからである。「できる人」「できない人」がいるのではなく、「できること」「できないこと」があり、さらには「できるとき」と「できないとき」というのもあるわけだ。

^c できるといふことと能力の区別の系譜をたどると、^(注7) アリストテレスのエネルギーとデユナミスの区別にまで至る。

エネルギーは「現実態」「実現態」と訳されるもので、実際に観察できる行為や現象である。それに対し、デユナミスは直接知覚されえない「可能態」「潜勢態」であるが、そのものに内属しているとされる潜在性や性向であり、一定の条件のもとで発現する。例えば、種子は植物となり花を咲かせるデユナミスであるが、土や水がないとエネルギーとして植物のかたちをとって成長し花を咲かせることはない。この区別に基づくなら、能力はデユナミスであり、実際になされた行為やその結果として形をとったものがエネルギーだと言える。問題は、デユナミスをもっとして知覚の（したがって評価の）対象とすることはできず、その対象となるのはあくまでエネルギーであり、しかもその状態が発現するためには一定の条件が必要だという点である。できる／できないということが状況や環境、活動の文脈の問題だというのは、この条件の形成という部分に関わるからである。□、能力の形成や実現という話は、こうした条件を整える

社会的な次元の問題だということになる。この点をふまえた上で私が主張したいのは、能力主義の中核的問題は、能力そのものが個人に帰属するの、社会的に構成・形成されるのかという点とは違うところに存するということである。それが市場の問題にはかならない。

(注8) 先に注で、個人化の進展とは、あらゆる次元において市場に依存することだというベックの指摘を引いた。それは俸給という労働力商品の売買においても同様である。具体的な例で考えてみよう。例えば、なぜAさんには一〇〇〇万円の報酬が支払われるのに、Bさんには一〇万円の報酬しか支払われないのだろうか。端的に言うところには市場における価格の差であるが、価格というものは、市場を介することで適正化する側面と、逆に差が極端に広がる側面とがある。後者の例は、稀少^{きしやう}価値のある物に対して購入者が競合し、価格が吊り上がっていくようなケースである。この場合、複数の買い手が競合する商品は値がどんどん上昇するが、買い手がつかない商品の価格はますます下落することになる。ヤングも有能な人材を獲得するための経営者間の競争について指摘していた。ここから言えるのは、対価の違いは、労働力商品を売る側の問題というより、それを購入する側に由来するということである。

こうしたいわばオークション的状况があるにもかかわらず、市場においては等価交換が行われているという信念が広く共有されているなら、対価に対して何らかのものが交換されているはずだという推論が働く。そこで等価交換されているはずのものこそ「能力」というわけである。その人が貴族だからとか、男性だからという理由でより高額な俸給をもらうのには納得できない人も、能力が高いからという説明には納得してしまう。そして自分がこれだけの給料しかもらえないのは、あるいはそもそも就職できないのは、能力が劣っているせいだと自分を納得させる。ここには次のような前提があると考えられる。近代化された社会では、人は何者であるか(属性)によって評価されない。機会の平等というかたちでスタート地点がそろえられたゲームにおいては、人は何をなすかによってのみ評価されなければならない。その評価に応じて対価をもらうのは正当である。貴族であろうと非労働者であろうと、何もしていない者が対価をもらうのは公正では

ない。ここには、なしたこととその対価とのあいだの等価交換という論理が認められるが、それは経済的であると同時に道徳的な論理でもある。対価の大幅な格差がある場合にもこの論理は持ち出されるが、実際になしたことのみでこの格差を説明することには無理があるので、そこに「能力」という可能態が持ち出されるわけだ。

^D 厄介なのは、「能力」にまつわるこうした言説が、現実の不平等を正当化するだけでなく、希望をもたらずものでもあることである。なぜなら、交換の原理は基本的に対等な者同士のあいだで働くものだからである。交換においてやりとりされるものは等価とみなされる。そこから交換にあたる人々もまた等価であるとみなされるのである。王と臣民が何かを交換することはできないのであって、対等な同じ人間だという前提が市場交換を成り立たせ、その交換の論理によって人は対等だとされる。そこに格差があるとすれば、それは当人がより少なくしか与えなかったからである。だが、少ししか差し出せなかった「能力」は、幸いなことに努力によって高めたり増やしたりすることが可能だとされており、そして当の交換自体が負債をヘンサイし、より大きな対価を受け取る可能性を保証している。能力を身につけ、高めさえすれば、それに応じた対価をあなたも受け取ることができるのです！

だが、労働力商品を売るという場面を考えると、そこにあるのは売り手と買い手のあいだの絶対的非対称性である。売り手は、なぜ自分が買われたのか、あるいは買われなかったのか本当は知らない。にもかかわらず、それは能力のせいだと考えるよう仕向けられる。ここから見えてくるのは、能力主義における「能力」とは、対価の差というかたちで現れる配分の不均等を等価交換の論理によって説明するために用いられる概念ではないかということである。これは、能力が個人のものか、社会的に形成されるものかというレベルの話ではない。実際に何か持続的・反復的にできることに対して日常的に用いられる「能力」についての語用と、能力主義における「能力」の用法は区別されなければならない。それは、現にある社会的富の配分の不均等を、市場における交換の論理によって説明するという語用論の文脈で捉える必要がある。だとするならば、能力を実体視し、その内実が読み書き能力からコミュニケーション能力やリスク管理能力などに変わった

とされるなか新たな能力を身につけたり高めたりすることを推奨するよりも、何かができたりできなかつたりすることと社会的な富の配分をまず独立の問題として区別した上で、どのような仕方配分するのが公正なのかを考えるのが筋であろう。能力主義の問題は、何よりもまず、能力の問題と配分の問題とを一緒くたにしてしまうところにある。そして、「能力」による解放や逆転の可能性にしがみつくことで、ますます能力主義の神話が機能することになるのだ。ここに能力主義の希望と絶望がある。

(松嶋^{まつしま}健^{たけし} 「交換の論理と『能力』」 『能力二〇四〇 AI時代に人間する』による)

(注) 1 エスニシティ——民族特性。

2 ブルジョワジー——資本家階級。

3 この産業化→移行でもあった。——この一文は、ドイツの社会学者であるウルリヒ・ベック(一九四四～二〇一五)の論を参照している。ベックは、個人化の進展とはあらゆる次元において市場に依存することだと指摘する。

4 メリトクラシー——個人のメリット(業績、功績)が、社会的選抜・配分の支配的原理となること。

5 マイケル・ヤング——マイケル・F・D・ヤング(一九一五～二〇〇二)。イギリスの社会学者。

6 リソース——物資や財源など、目的達成に必要な要素。

7 アリストテレス——古代ギリシアの哲学者(前三八四～前三二二)。

8 先に注で——注3のことを指す。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが 1、イが 2、ウが 3

ア ボツコウ

- a キンコウを保つ
b 映画のコウギョウ成績
c キョウコウ手段を取る
d 紅白タイコウのリレー

イ オチイらせる

- a 商品にケツカンが見つかる
b 絵画のカンテイを依頼する
c 注意カンキを行う
d 行動がイツカンしている

ウ ヘンサイ

- a 野菜をサイバイする
b 必要事項をキサイする
c 難民をキュウサイする
d 話の続きをサイソクする

問2 波線部「天賦のもの」の本文中におけることばの意味として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。

解答番号は **4**

- a 周りの評価で決まるもの
- b 先祖から受け継いでいるもの
- c 前触れなく現れるもの
- d 何があっても変わらないもの
- e 生まれつき備わっているもの

問3

空欄

に補うことばとして最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は

5

- a つまり
- b ところが
- c なぜなら
- d ただし
- e あるいは

問4 傍線部A「カーストの方がよほど善きものであった」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当

なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **6**

- a 個人がそれぞれ自分の利益を追求する社会では、市場の競争原理によって貧富の差が大きくなる場合もあるため、カーストの方が社会全体で富を均等に配分できるということ。
- b 職業選択を完全に個人の自由に任せる社会では、社会を成り立たせる必要不可欠な職業の人員が不足する場合もあるため、カーストの方が社会の生産活動が安定的に継続できるということ。
- c 職業選択が本人の能力次第になってしまうと、自分は何ができるかという問いに対して答えがでない場合もあるため、カーストの方が自分の存在価値を疑う余地がないということ。
- d 産業化によって社会的流動性が高まると、誰もが富や権力を持つことができ支配階級に対して反抗する場合もあるため、カーストの方が支配階級にとって有利な仕組みを存続できるということ。

問5 傍線部B「能力主義は業績主義と同じようなものだ」と見なされている」とあるが、これはなぜか。その説明として

最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は 7

a 能力は、個人が所有しているモノのようにイメージされており、業績と同様に、本人の意志と努力によって伸ばすことができるものだと考えられているから。

b 能力は、個人に帰属するモノのようにイメージされており、業績と同様に、個人のアイデンティティを形成する重要な要素だと考えられているから。

c 能力は、意識的に身につけられるものとイメージされており、業績と同様に、これまでにどれだけ努力してきたかがわかる指標だと考えられているから。

d 能力は、本人の資質とは関係がないものとイメージされており、業績と同様に、当人の努力などを基準として他者が評価できるものだと考えられているから。

問6 傍線部C「できるといふことと能力の区別の系譜をたどると、アリストテレスのエネルゲイアとデユナミスの区別

にまで至る。」とあるが、これはどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の

a～dのうちから一つ選べ。解答番号は **8**

a 実際の行為や結果として観察できる業績は直接知覚できない能力が発現したものであるという考え方は、アリストテレスがエネルゲイアを能力の中核と捉え、デユナミスを軽視した反省からもたらされたということ。

b 能力と業績とを区別するという考え方は、直接知覚できない能力としてのデユナミスと、実際の行為や結果として観察できるエネルゲイアとを区別するというアリストテレスの言説に由来しているということ。

c 状況や環境などが整えば、あらゆる能力は誰にでも実現する可能性があるという考え方は、デユナミスがエネルゲイアとして発現するための状況や環境の必要性を説いたアリストテレスの言説に起因するということ。

d 能力の実現には社会的条件が関わるといふ考え方は、遡ればデユナミスがエネルゲイアとして発現するには一定の条件が必要であるというアリストテレスの言説にまで至るほど、以前から議論されているということ。

問7 傍線部D「厄介なのは、『能力』にまつわるこうした言説が、現実の不平等を正当化するだけではなく、希望をもた

らすものでもあることである。」とあるが、このことに関する説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから

一つ選べ。解答番号は 9

a 市場では、有能な人材を獲得するために経営者がより高い報酬を払おうとしており、労働者の間では様々な能力を身につけている者がより高い対価を得るのは当然だという考えが浸透している。こうしたことから、労働者は自分に足りない能力を分析し、業績につながる能力を身につけようと積極的に取り組むようになる。

b 市場では、適正な対価が支払われていないにもかかわらず、能力と対価との等価交換が行われているという誤解が生じている。経営者はこの誤解を利用し、不当に安い対価のまま労働者に能力を伸ばすよう仕向けているが、労働者はそれに気づくこともなく、努力することは道徳的にもよいと信じている。

c 市場では、買い手の都合によって大幅な対価の差が生じるにもかかわらず、なしたことと対価が等価交換されるという無理のある論理が持ち出される。この論理を説明するため、なしたことの代わりに対価の根拠として直接知覚できない能力が用いられ、能力を伸ばせばより多くの対価がもらえると売り手を前向きにさせる。

d 市場では、売り手と買い手が対等であるという前提で、なしたことと対価の公正な交換が行われていると認識されており、対価の差が生じるのは能力の差が原因であると認められている。そのため、対価の差は能力の正当な評価の結果と考えられ、売り手と買い手の対等な関係の証拠として売り手に歓迎されている。

問8 次に示すのは、本文を読んだ後に、五人の生徒が話し合っている場面である。本文の趣旨に合致しないものを、次の

a～**e**のうちから一つ選べ。解答番号は **10**

a 生徒A——能力主義の「能力」について、筆者は私たちが普段使っている「能力」という概念と異なると言っているんだよね。私たちは、「能力」を実際にできることという意味合いで使っているよね。

b 生徒B——何かができるということは、技術の進歩の影響も受けているよね。たとえば英語が話せなくても、翻訳機能がついたスマートフォンがあれば、相手に英語で意思を伝えられるのがいい例だ。

c 生徒C——能力は本来目には見えないものだけれど、市場においてはまるで実体があるもののように評価されている。能力に基づいて様々な取引が行われていると思われているんだよね。

d 生徒D——就職試験で、数名の中から一人だけ選ばれるような場合、採用された人には優れた能力があったんだと思うってしまうよね。会社側がどんな選考基準で選んだのか、雇われる側にはわからないのね。

e 生徒E——コミュニケーション能力やリスク管理能力など社会人に求められている能力はいろいろあるから、今から頑張るって身につけることが大事なんだね。採用する側にも、能力を適切に評価してもらいたいな。

問9 筆者の考えに合致するものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **11**

- a 「能力」にもとづく格差や不平等は仕方のないものだという考えが定着しているため、富の配分の問題を少しでも解消するために、社会全体で個人が新たな能力を身につけられるような制度を構築していく必要がある。
- b 能力主義における「能力」は、市場における配分の不均等を説明するために作られた概念であるため、日常的に使われている「能力」という言葉とは意味が違うことを人々に正しく説明する必要がある。
- c 能力主義では、「能力」が交換可能なモノとしてイメージされ市場原理の正当化に利用されているため、能力の問題と富の配分の問題は区別した上で、公正な配分ができる方法を検討する必要がある。
- d 労働力商品の売買の場面ではオークション的状况で対価が決まるため、対価は能力に応じて適正に支払われていると人々が納得できるように、個人の能力を客観的に評価できる仕組みを考える必要がある。

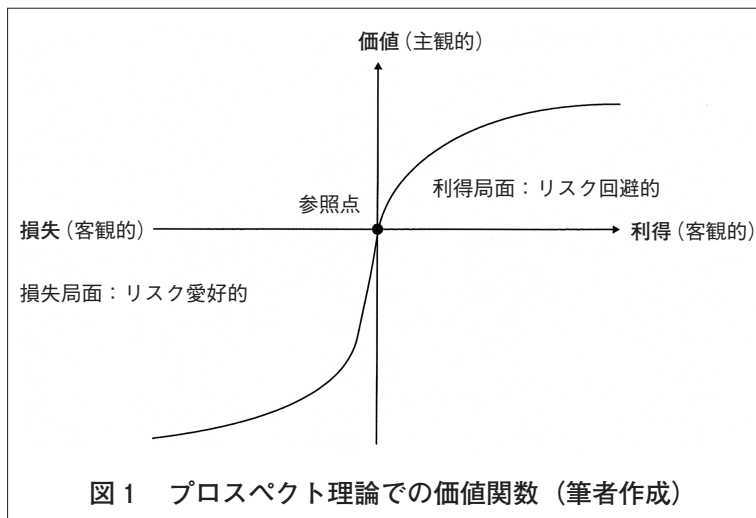
第二問

次の文章は、健康づくり分野における行動変容への介入について、伝統的な経済学及び行動経済学の観点から考察しているものである。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、出題の都合上、本文を一部変更した箇所がある。

^A 伝統的な経済学では、健康行動について将来の健康に対する自分の現在の行動の影響をわかっていて意思決定を行うという見方が優勢であった。例えば、患者が途中で治療を中断してしまうことも、^(注1)ヒューリスティクスや認知バイアスが影響しているのではなく、今ある情報の下での合理的な判断だと考える。そのため、患者が十分な情報を持っていないことは問題だとされ、医療者―患者間の情報のやりとりを改善し、適切な情報を与えることが最も重要だということになる。さらに、患者側についても合理性が基本となるため、医療者側が非合理だという想定はなおさら一般的ではない。したがって、健康行動や治療に関する意思決定は個人の合理的で自由な選択の結果であり、そこにわざわざ介入するのは^{やば}野暮ということになる。

伝統的な経済学で意思決定への介入が正当化されるのは、自由な取引ではうまくいかない「市場の失敗」の時に限られる。その一つが外部性である。外部性とは、市場取引の結果が第三者に及ぶことを意味する。医療の例で言えば、ワクチンは接種した本人だけでなく、集団免疫のおかげで周囲の人々の感染リスクをも下げる。つまり、ワクチンは個人の利益の合計以上に社会全体に利益をもたらしてくれる（ワクチンは他者に利益をもたらすため、正の外部性があると言う。一方、大気汚染や受動喫煙による健康被害は負の外部性と言う）。他人への恩恵を自分のことのように思ってワクチンを接種してくださいと推奨しても、人々が集団免疫に必要な接種率に達するまで十分に接種してくれないのであれば、接種を促すためにワクチンの価格を下げた方がよい。

①、感染症対策としてのワクチン接種に対する補助金は、伝統的な経済学においても支持される。



健康づくりの分野におけるもう一つの重要な「市場の失敗」は、情報の非対称性である。これは、医療者—非医療者間の知識の相違で起こる様々な非効率性を指す。情報の非対称性については、本来は必要ではない医療サービスを、非医療者がわからないことを利用して受けさせるというように、過剰な医療サービス（供給者誘発需要と呼ばれる）が問題視されていた。逆に、予防行動をとらないなどの保健医療の過小性については、人々が合理的に選択した結果だという理由で介入の必要性は高くないとされていた。

一方、行動経済学では、人々は将来のことを見渡して意思決定を行っているのではなく、行動を続けようと思っても決心がにぶり、健康状態が悪化して初めて後悔するといった人間の特徴を重視する。効果が高い治療を受けてくれない患者や適切な予防行動をとらない人の特徴について、行動経済学で注目されているものがいくつかある。

一つ目は「近視眼的な選好」で、目の前の利益や費用を将来の利益に比べて過度に重視することである。将来の合併症発生やそれに伴う医療費よりも、現在の自己負担や治療を受ける煩わしさを重視する患者は少なくない。

二つ目は「先送り傾向」である。たとえば将来のことを考えて「イッタン」は決心しても、いざ行動に移す時になると決心がにぶる場合も多い。

三つ目は「客観確率と主観確率の乖離^{かいり}」である。リスクが高い人は、疾病リスクを過小評価することが多い。例えば、喫煙者は自分自身は将来肺がんにはならないと考えがちである。

四つ目は「損失回避」である。「治療すれば健康になります」という利得を強調した言い方と、「治療しなければ健康を損ないます」という損失を強調した言い方で

は、どちらがより行動する（治療を受ける）気になるだろうか？ 絶対値が同じであっても、利得より損失の方が満足度（効用）に与える影響は大きいことがわかっている。

^B プロスペクト理論は、この「損失回避」を理論化したものである。伝統的な経済学では利得や損失の絶対的な水準で意思決定を行うと想定するのに対し、プロスペクト理論では、「参照点」という個人ごとに決めている選択の基準からの利得や損失の乖離幅によって意思決定を行うとする。図1はこの傾向を図示したもので、伝統的な経済学で使われる効用関数ではなく、客観的な利得や損失の参照点との乖離幅と主観的な価値の間の関係を価値関数として表す。

（中略）

健康行動に関する前述のような行動経済学的な人間の特徴を利用して、より健康を改善する介入がこれまで行われてきた。まず、ナッジの前に盛んに行われたのは、行動変容へのインセンティブ付与^(注3)であった。

近視眼的な嗜好によって「遠い将来に良いことがありますよ」と言っても聞いてもらえないのなら、逆にそれを利用して、行動を変えることに今すぐ利益を与えてしまえというのが「インセンティブ付与」である。米国の企業での禁煙プログラムで有効性が報告されたことなどから注目を集め、多くの実証研究が行われた。

（中略）

インセンティブのように「ニンジンをおくら下げる」ことはせず、かといって選択肢を狭めることもなく行動変容を促すことはできないのであろうか。選択を禁じることも、経済的なインセンティブを大きく変えることもなく、人々の行動を予測可能な形で変える選択アーキテクチャのあらゆる要素をナッジと呼ぶ。

日本で行われた医療政策の中にもナッジの例はある。それまで後発医薬品に「変更可」の場合にチェックを入れる形式となっていた処方箋の様式を、二〇〇八年からは「変更不可」の場合にチェックを入れる形式に改めた。後発医薬品を選ぶか否かの選択自体を強制しているのではなく、デフォルト^(注5)（初期設定）を変えることで後発医薬品処方促している。

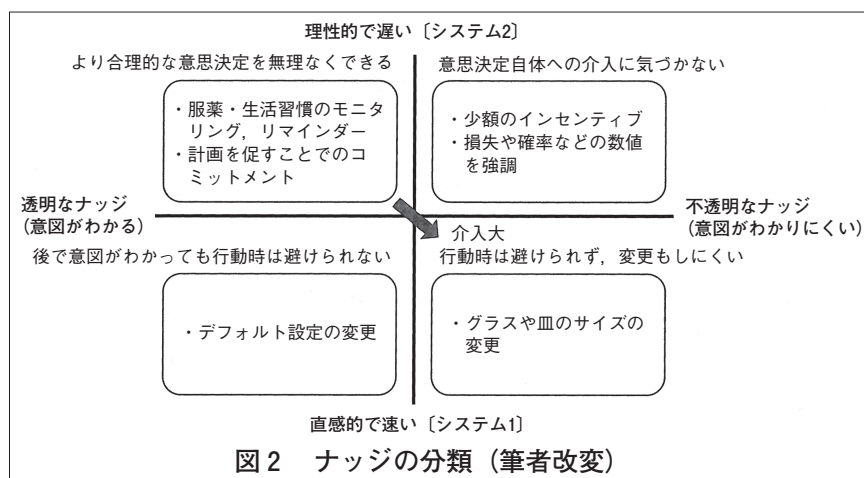
これは、以前EU諸国において臓器提供意思表示のデフォルトを「提供しない」から「提供する」に変えたことで、臓器

提供意思表示者の率が高まったことと同様である。

選択肢は変えないものの、健康に良い影響を与えるような情報を選んで提供すること自体「情報ナッジ」と呼ぶ場合がある。さらに、提供する情報の見せ方として、

前述の行動経済学的な特徴を利用する方法もある。一般に、現在の利得を重視し損失回避傾向を持つ人々には、将来の利得があることを伝えるより、今得られるはずのものが得られなくなってしまうこと（損失）を強調するメッセージの方が、行動変容には効果的であることがわかってきている。日本でも公的ながん検診の受診勧奨について、情報ナッジを用いた取り組みが行われている。これまで、公的な予防サービスのコクチ¹と言え、お世辞にも人々の行動の特徴を利用したものとは言えない②なものばかりであったが、少しの工夫で受診勧奨が効果的にできれば費用対効果も高い。

ナッジは、古い医師と患者との関係のような、健康に良い治療や生活習慣を上から強制する温情主義（パターンナリズム）とも違い、完全に自由に任せる自由意志主義（リバタリアニズム）とも違う。ちょうど両者の真ん中のナッジを用いるこの政策的な考え方は、リバタリアン・パターンナリズムと呼ばれ、インセンティブに比べると費用も



かからず行動変容を引き起こすことができる」と注目された。

(中略)

一方、消費者への介入は最低限の方がよいという立場からは、ナッジを分類しできるだけ介入の弱いナッジに限った方

がよいのではないかという指摘もある。図2では、ナッジを意思決定の二つのタイプ（「直感的で速い」システム1と「理性的で遅い」システム2）のどちらに関わるかと、ナッジの意図が相手にわかるかどうか（透明性）で分類している。

図の左上は、理性的で遅い意思決定、つまり合理的な意思決定を無理なくできるように、意図がわかる透明なナッジを施すというものである。服薬・生活習慣のモニタリングやリマインダー、予防行動を行うためのスケジュールを立てる形（注7）のコミットメントは、行動変容の煩わしさ（費用）を取り除くことで、将来の健康につながる行動という合理的な意思決定が無理なくできる助けをするという意味で、介入が最も弱いと考えられる。一方、少額のインセンティブ、あるいは損失や確率の数値を強調するなど情報の提示の仕方を変えることは、行動自体の意味を伝えているわけではないので、意図がわかりにくい不透明なナッジと分類されている。

同じ意図がわかる透明なナッジであっても、直感的で速い意思決定にナッジが施されると、行動変容を促す側の意図を深く考えずに選択するために、行動自体を避けることができない。しかし、後で意図がわかった時に行動を変更することは可能である。デフォルト設定の変更などは、直感的で速い意思決定に対する透明なナッジと分類されている。一方、グラスや皿のサイズが変更されることは、行動自体を避けることができないし、選択を元に戻すこともできない。ある意味だまし討ちとも言える。そのため、直感的で速い意思決定に対する不透明なナッジと分類され、最も介入が強いナッジとされている。

ナッジは多くの場合、行動変容の意義を実感してもらい真の意味で変わってもらうというよりは、健康に悪い行動を防ぐための「転ばぬ先の杖つえ」を用意していると言える。もしいざとなると決心がにぶるのであれば、事前に自分で転ばぬ先の杖を積極的に用意することもできる。行動変容しなかった場合に損をするようなルールを事前に作っておくことを「プレコミットメント」と言う。消費者の意思決定への介入が弱いことが重要なのであれば、自らプレコミットメントを設けてくれる人がいればそれに越したことはない。

ところが、自発的に転ばぬ先の杖を用意しておけるような人は少ない。ある禁煙プログラムでは、始める前にお金を差し出しておき、もし禁煙に失敗したらそのお金が没収されるようなプレコミットメントを設定できるようにした。そのようなプレコミットメントを自発的に行う人は10%程度であったという研究がある。自分の意志の弱さを理解し、対処法を自ら進んで事前に考える人は少ない。かといって、プレコミットメントを強制してしまったのでは温情主義と変わらないし、先ほどのインセンティブと同様に内発的動機付けをソグアイ^ウしてしまうかもしれない。

行動経済学的な対策は、人間の心理とも強く関係し、また、社会との関わりも大きい。そのため、どのように行うかはエビデンス^(注8)も重要だが、そもそもある対策を行うべきかどうかという規範的な検討も重要である。

(後藤^{ごとう}励「行動経済学とナッジ」『ナッジ×ヘルスリテラシー』による)

(注) 1 ヒューリスティクス——直感的に行われる簡便な意思決定。

2 認知バイアス——ここでは、自分の思い込みや周囲の環境などによって、合理的な意思決定から外れてしまうような「思考のミス」のこと。

3 インセンティブ——報奨。動機付け。

4 選択アーキテクチャ——「アーキテクチャ」とは元来、建築や構造という意味。ここでの「選択アーキテクチャ」は、人々が物事を選択する際の環境全体のこと。筆者は、行動変容を促すには本人の選択や判断が行われる環境や選択肢をうまく設計する必要があると考えている。

5 デフォルト——ナッジにおける「デフォルト」とは、最初から何かが選ばれている状態を指している。初期設定を変更する選択(オプトアウト)も可能になっている。

6 モニタリング——観察。

7 コミットメント——約束、関与、責任などを意味する言葉。

8 エビデンス——根拠、証拠。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが12、イが13、ウが14

ア イツタン

- a ジタン勤務を申請する
- b ガンタンに初詣をする
- c 品物のタンカを計算する
- d 最センタンの技術を導入する

イ コクチ

- a 困難をコクフクする
- b 内部者によるコクハツ
- c 課題提出のコクゲンが迫る
- d 本物とコクジした贋作がんさく

ウ ソガイ

- a クウソな内容で落胆する
- b ヘインから準備をしておく
- c 必要なソチを講ずる
- d 敵の陰謀をソシする

問2 空欄 ① に補うことばとして最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 15

a したがって b むしろ c なぜなら d しかし e さらに

問3 空欄 ② に補う表現として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 16

a 曲学阿世 b 大言壮語 c 当意即妙 d 温厚篤実 e 無味乾燥

問4 傍線部A「伝統的な経済学」の考え方についての説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。

解答番号は 17

a ヒューリスティクスや認知バイアスの働きを抑えれば、患者が途中で治療を中断してしまうなど非合理的な判断を下すことはないため、医療者は患者の意思を基本的には尊重しなければならない。

b 社会全体として人々の健康状態を向上させるため、患者が適切な判断ができるように医療者が十分な情報を提供し、患者とのコミュニケーションを図りつつアドバイスを与えるべきである。

c 患者は健康行動について将来の健康に対する自分の現在の行動の影響を理解できるため、医療者は健康行動や治療に関する意思決定を個人の自由な選択として認め、わざわざ介入すべきではない。

d 個人の意思決定を尊重すると社会全体に不利益がもたらされるため、ワクチン接種を迷う人々がその意義を理解できるように、医療者は理路整然とした説明を行い納得させなければならぬ。

e 健康に関する予防行動においては、医療者が患者に十分な知識を与えるのが難しいことに加え、人々が合理的な意思決定を行うことも期待できないため、保健医療の保障を充実させるべきである。

問5 傍線部B「プロスペクト理論は、この『損失回避』を理論化したものである。」とあるが、「プロスペクト理論」をふまえるとワクチン接種についてどのようなことが言えるか。次に示す【資料】や本文の図1を参考にしつつ、**適当でないもの**を、後のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **18**

【資料】（出題の都合上、本文を一部変更した箇所がある）

問題1 A コインを投げて表が出たら2万円もらい、裏が出たら何ももらわない。

B 確実に1万円もらう。

問題2 C コインを投げて表が出たら2万円支払い、裏が出たら何も支払わない。

D 確実に1万円支払う。

このコイントスの質問では、問題1でBを選び、問題2でCを選ぶ人が多い。平均的な利得は、問題1ではどちらの選択肢も1万円の利得であり、問題2では、どちらも1万円の損失である。

（中略）

このような私たちの意思決定の特性が損失回避と呼ばれるものであり、**図A**^(注)を使って説明されることが多い。この図では、横軸に利得と損失を示している。原点は参照点を表している。参照点というのは、比較対象とする水準である。典型的には、今もっている所得水準を参照点とすることが多い。つまり、今の所得を参照点とすれば、それより所得が増えることが利得であり、参照点の所得より所得が減ることが損失である。右側にいくほど、参照点からの利得が大きくなることを示している。逆に、左側にいくと参照点と比べて損失が大きくなることを示している。縦軸は、それぞれの利得や損失から得られる価値である。利得を得られれば、嬉しいという正の価値を感じる。それが、原点か

ら上にいくと正の価値が大きくなることが表現される。逆に、原点から下にいくと損失からの負の価値が大きくなることを意味する。

損失回避とは、**図ア**において、原点である参照点の左右で、価値を示す曲線の傾きが大きく異なることをいう。具体的には、利得を生じた場合の価値の増え方と損失が生じた場合の価値の減り方は、後者の方が大きいということである。つまり、利得・損失と価値の関係を示す曲線が原点の右と左で傾きが異なっていて、損失の局面の傾きが大きい。これは、損失の場合は、少しの損失でも大きく価値を失うということを意味する。つまり、利得よりも損失を大きく嫌うということである。これが損失回避である。

(大竹 文雄 『行動経済学の使い方』による)

(注) **図ア** —— 本文掲載の**図1**と同様のものであり、ここには掲載していない。

- a** 感染症にはかかるものと考え「罹患りかんした時」を参照点とすると、ワクチンを打って予防することは利得局面となるため、ワクチン接種によって高い予防効果を得ることを重視するリスク回避的な選択をする。
- b** 普段の「健康な状態」を参照点とすると、ワクチン接種による痛みや副反応のリスクという損失局面は軽視することができるため、ワクチンを接種することによって健康を維持する選択をする傾向が強まる。
- c** 病気になっていない「健康な状態」を参照点とすると、ワクチン接種は副反応のリスクがある損失局面での意思決定となるため、感染症にかかる可能性が高まるとしてもワクチン接種をしないことを選択する。
- d** 感染症にかかる確率を過小評価する場合は、ワクチンを接種しない可能性がますます高くなるため、ワクチン接種を促すためには、人々に参照点を変えるよう働きかけ利得局面の選択を考えさせるのがよい。

問6 傍線部C「提供する情報の見せ方として、前述の行動経済学的な特徴を利用する方法もある」とあるが、「情報ナ

ッジ」の具体例として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は19

- a 大腸がん検診を推進するため、検診の案内に、例年配布している「大腸がん検査キット」は早期申し込みをしなくては送らないという情報を加える。
- b 献血に協力する人を増やすため、教育現場やショッピングモールで献血を行うこととし、協力した人にはお菓子や飲み物などを配布すると広報する。
- c 臓器提供者を確保するため、脳死になった場合の臓器提供を義務づけ、運転免許証と臓器提供意思カードを一体化させることでその周知をはかる。
- d 予防接種の接種率を上げるため、接種した人と接種を行っていない人の罹患率の数値を随時公表するなど、ワクチンの有効性が読み取れるデータを示す。
- e 心臓病を予防するため、定期的な運動を継続すれば将来の心血管疾患の発症リスクを下げられることを、科学的根拠を用いて論理的に説明する。

問7 次に示すのは、本文を読んだ後に生徒が話し合いをしている様子である。これを読んで、後の(1)～(3)に答えよ。

生徒A——健康づくりの分野では、健康の改善が求められているけれど、個人の行動にどこまで介入するのかに関しては、伝統的な経済学と行動経済学では考え方が違うようだね。

生徒B——行動経済学では、人間は のがよいということだよ。

生徒C——こうした考え方を活かした対策のうち、インセンティブ付与は、最初は行動変容が見られたけれども、内発的動機付けには繋がらなかつたから、習慣として定着するには至らなかつたようだよ。

生徒D——そこで期待されているのが「ナッジ」なんだよね。図2では「ナッジ」を2つの観点から分類している。

横軸に注目してみると、意図のわかりにくいナッジの方が意思決定への介入はより強くなるわけだね。

生徒A——一方で、縦軸に注目すると、 ということがわかる。

生徒B——人間にとって健康は最重要項目であり、「ナッジ」の活用は効果的だけど、様々な課題を含んでいるね。

生徒C——現在、消費活動の場面など様々な領域でナッジは利用されているようだよ。今後ますます利用範囲が広がらそうだよ。 ということが言えそうだね。

(1) 空欄 に入る発言として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は

- a 自発的に将来の健康を考えて行動を変えるのが難しいので、人間の特徴を利用して意思決定へ関与する
- b 健康に対する多様な価値観をもつので、本人の意思決定を尊重し、医療者の価値判断による指導はしない
- c 健康に関して適切な行動を継続できないので、特に意志の弱い人に対して合理的な考え方を提供する
- d 自分の健康に関して客観的に判断できても行動を先送りしてしまうので、強制的に行動への介入を行う

(2) 空欄 **Y** に入る発言として最も適当なものを、次の a～d のうちから一つ選べ。解答番号は **21**

a ナッジの意図を伝え理性的な判断を促すのであれば、医療者が説得することと同じになり、人々の行動の特徴を利用したものにはならない

b ナッジの意図がわかってしまうと人々は理性的に行動を選択するので、将来の健康に関する行動変容は期待で
きない

c 直感的で速い意思決定を求めるナッジが施されると、人々はたとえナッジの意図がわかったとしても設計者の意図に従って行動せざるを得なくなる

d 直感的で速い意思決定を求めるナッジを設定すると、人々を騙だましていることになるので、人々のナッジに対する忌避感が高まる

(3) 空欄 **Z** に入る発言として最も適当なものを、次の a～d のうちから一つ選べ。解答番号は **22**

a 伝統的な経済学の考えに則のっとって人間の理性に期待し、豊かな生活のためにナッジに頼らず自由を尊重すべきだ

b ナッジの活用に制限を設ける必要はないが、健康のための活用に関しては意図が明確なものに限るべきだ

c 行動の改善にはナッジの活用が必要不可欠なので、ナッジの使用を隠して効果が失われないようにすべきだ

d ナッジは人間の特性を利用した形での行動変容を促すものであるため、自由の尊重に関する議論も必要となる